

⑥ 飼料作物
サイレージ用とうもろこし

ア 導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

- サイレージ用とうもろこしの作付け品種は、地域の気象条件により作付け熟期が大きく異なるので、北海道優良品種の中から地域の気象条件にあった品種を選定する。
- 施肥標準の窒素施肥量は土壌型や地帯により異なり8～17kgN/10aで、基肥は10kgN/10a（根鋤、十勝では8kgN/10a）を限度とし、残りを7葉期（根鋤では4葉期）までに分施する。
定期的に土壌診断を実施し、施肥量の適正化に努める。
心土破碎など耕盤層対策を実施し、十分な根域を確保する。
化学肥料の代替えとして家畜ふん尿を施用する場合は、肥料成分の分析（ECによる推定法などの簡易分析を含む）を行う。その結果に基づき、家畜ふん尿処理利用の手引きや環境に配慮した酪農のためのふん尿利用計画支援ソフト「AMaFe」を活用し、環境に配慮した適正な活用を行う。
- 病虫害防除では、適正輪作の実施、抵抗性品種の利用などにより、化学合成農薬の使用は、種子消毒剤の1回のみとする。
また、雑草対策では機械除草またはマルチ栽培技術（リビングマルチ）を導入し、除草剤の使用を削減する。

◎持続性の高い農業生産方式に係る技術（省令指定）

区 分	技 術 名	使用の目安
たい肥等施用技術	たい肥等有機質資材施用技術 緑肥作物利用技術	たい肥1t/10a以上。 前植生（草地）の鋤込み、前作物の後作緑肥または、休閑緑肥を利用。
化学肥料低減技術	局所施肥技術 肥効調節型肥料施用技術 有機質肥料施用技術	現行の化学肥料（窒素分量）の施用をできるだけ減らす。
化学農薬低減技術	機械除草技術 抵抗性品種栽培・台木利用技術 マルチ栽培技術	現行の化学合成農薬の使用をできるだけ減らす。

- 〈留意事項〉
- ・ たい肥、家畜ふん尿のほ場への過剰な還元に陥らないように留意する。
 - ・ 化学肥料及びたい肥等家畜糞尿の有効成分合計量が施肥標準の上限を超えない範囲で施用する。
 - ・ 低薬量での効果を高めるため、ほ場の砕土整地を丁寧に行う。

イ 持続性の高い農業生産方式の導入の促進を図るための措置に関する事項

- 持続性の高い農業生産方式の導入に当たっては、市町村・農協等の分析施設を活用した土壌診断や農業改良普及センターによる施肥等の指導を受けることが適当である。
- また、病虫害防除所および農業試験場が提供する病虫害発生予察情報を活用することが適当である。

ウ その他必要な事項

- 地力増進法に基づき地力増進地域に指定されている市町村では、「地力増進対策指針」に基づく対策を行うこと。